

旅の行き先

川崎 栄太

道はやけに混んでいてタクシーがまったく流れていない。

やっと思ついても、先に誰かに乗られてしまう。

「早くしないと間に合わない」

焦る気持ちが高まる。

そういえば、わたしはどこに向かっているのだろうか。

疑問を感じるところで目の前は光に包まれ、そして、目が覚める。

「ああ、また夢か」

夢を見た後は、身体はぐったりと重く、アタマだけはスッキリとする。

疲れが溜まると、いつも似たような夢を見る。

夢の中のわたしは、どこかに向かっている。

だけど進みたくても進めない。

自動車の道のり、列車の乗り換え、飛行場への移動、場面は様々だが、決まっているのは、いつもどこに向かっていること、そして、どこに向かっているのかが分からないこと。

行き先の無い旅。わたしはどこに向かっていたのだろうか。

わたしは福祉の仕事をしている。自立支援の相談員だ。

福祉といえば「あたたかい」イメージを持つ方が多いのだが、実際はなかなか壮絶だ。

相談の内容は、お金のこと、病気や障害のこと、人間関係のこと等、どれも現実的な問題ばかりだ。それに加えて、DVや虐待といった緊急的な相談だって飛び込んでくる。実際の福祉は、まさに戦場だったのだ。

だからか、いつも身も心も疲れているのかもしれない。

ある時、わたしはお金に困っているというご家庭を訪問した。玄関にはキリスト教のポスターが貼られていた。わたしは「このご家庭は熱心なんだな」と感じたが、無表情を装った。

お話を聞いていくと、ご家庭はとてつもなく苦しい状況だった。

妻は重い発達障害を抱えていて、常に自分の衝動と戦っていた。

4人のお子さんたちは、まだ小さく、それぞれに異なる障害を抱えていた。

夫は家族を守るために働いていたが、身体が弱く、十分に稼ぐことが難しかった。

た。

とても厳しい状況だった。貧困と障害、そして子育て。にわかには解決できない問題を、このご家庭は抱え続けてきたのだ。

だが、わたしは職務経験からひとつの違和感を覚えた。それは、このご家庭の雰囲気は明るく、家族同士で支え合っていたことだ。

困窮を抱えるご家庭の多くは、その苦しみからなのか、家庭環境が荒廃している。笑顔が消え、支え合いが消え、どんよりとした空気が充満する。しかし、このご家庭には、そのような「負」が無いのだ。

「食事のときは、子供たちに聖書を読んで聞かせんるです」

妻は嬉しそうに話す。六人家族として大きいとは言えないダイニングテーブルには、聖書が大切に置かれていた。

「これこれ、お客様にその話は、、」

夫はすかさず止めるのだが、わたしはそのやりとりが微笑ましく感じた。

「もしかしたら、このご家庭は、旅の行き先が分かっているのではないか」

訪問を終えたわたしは、職場に戻るべく自転車を漕ぎながら、ご家庭と今朝の

夢を重ねていた。すると、わたしのぐったりとしていた身体の底から、少しだけあたたかい気持ち湧いてきた。ペダルを漕ぐ足は、少し軽くなった。